【 4 】

氏　　名	広川洋一（ひろかわよういち）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第116号
学位授与の日付	昭和52年7月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**ヘシオドス研究序説** —ギリシア思想の生誕—
論文調査委員	（主査）教授 松平千秋　教授 藤澤令夫　教授 清水純一

論文内容の要旨

博学は知性（noos）を持つことを教えぬ，とするヘラクレイトスによって，ピュタゴラス，クセノパネス，ヘカタイオスとともに（単なる）博学者の中に数えられたヘシオドスであったが，著者は本書において，ヘシオドスこそ知性をもった人であり，宇宙の秩序に深く思いをいたし，自ら思索することのできた最初のギリシア人であることを独自の立場から論証しようとする。「自らすべてを知識する（noesei）人こそ最上の人」（「仕事と日」293）といい，自ら思索することを知らぬ無頼の弟ペルセスに訓戒を垂れるヘシオドスが，ヘラクレイトスの意味するところとは同じではないにしても，やはり noos を持つか持たぬかを，最も重要な批判の規準としたことは明らかである。詩人ヘシオドスがその主要作品「神統記」と「仕事と日」とにおいて，自らの思索により真実として見出したものを著者は秩序の観念，それも大宇宙と人間の在り方とを貫通する全一的な整序原理であると考える。詩人はその初期の作品「神統記」において，ゼウスによって開示された秩序世界（コスモス）の原理を告知している。「神統記」より後の作品と見られる「仕事と日」はこれに対して，人間的秩序—正義—を主題とするが，詩人の考えによれば，人間的秩序すなわち正義は大宇宙の秩序に順応せんとする努力によって初めて実現されるのである。「仕事と日」が農事暦の形式をもって構想されたのも，そうした思想と深い関わりがあると著者は考える。「仕事と日」において詩人の最も円熟した思想の結実を見る著者は，その主題である正義について様々な視点から考察を進めてゆく。

本論文は序論と三部より成り，巻末に「神統記」「仕事と日」の著者による邦訳を附録として加える。

序論では，全一的秩序の原理を知的に把握解明する姿勢をギリシア思想の基本的特質と見る立場からヘシオドスをギリシア思想の始端に位置づけることが可能であることを説く。

第1部は4章より成り，まずいわゆる五時代説話を検討し，詩人の正義観を展望するとともに，「恥（アイドース」「希望（エルピス）」「徳（アレテー）」など，本論文に現われる主要観念に注目し，それらがいずれも正義を指向し，正義の観念と緊密につながるものであることを解明せんとする。

第2部は5章より成り，著者はここで正義の問題を，とりわけて大宇宙の秩序原理との関連において考察し，人間的秩序としての正義が宇宙原理に基礎づけられながらも，その間に一種のへだたりのあることを指摘する。例えば正義（ディケー）がゼウスとテミスの娘「季節（ホーライ）」の一人であることに着目し，「時期に外れぬこと」が正義の自然的基礎であること，「正しい（dikaios）」の語が神や自然についていわれることはなく，専ら人間にのみ適用されること，神々と人間とを決定的に区別する要素として「労働（ergon）」があること，労働は本来神が人間に罰として課した苦しみなのであるが，詩人はこれを喜ばしきものに転化させ，労働によってこそ正義が実現されると信じていること，などが論ぜられる。またホメロスにおけるディケー，ディカイオスなる語の意味するところと，ヘシオドスにおけるそれを比較し，抽象概念としてのディケーはヘシオドスにおいて初めて確立されたとする。

第3部は2章より成り，主として「仕事と日」の構造分析を通じて，知性の詩人ヘシオドスの精神構造を解明しようとする。いわゆる「日」の部分に充満する非合理的な要素が詩人の精神とどのように関連づけられるかを考察し，知性の詩人ヘシオドスが決して狭隘な合理主義者ではなかったことを明らかにする。最後に，「日」の部分は古来その真偽について論議が喧しかったが，著者は偽作説の最も重要な根拠とされる日次順の混乱も，仔細に見ればそこに一定の規則性のあることが認められるとして，外的形式よりしても，この部分がヘシオドスの精神にそぐわぬものではないと結論する。

論文審査の結果の要旨

本論文は400頁を越える大著であり，十数年来著者がひたむきの情熱を傾けて取り組んできたヘシオドス研究の結実ともいうべき労作である。論文は序論，第一部，第二部，第三部より成り，巻末には著者自身の手による「神統記」「仕事と日」の邦訳を附す。

序論において著者は，宇宙の秩序の原理を知性によって把握解明するのがギリシア思想の基本的姿勢であるとすれば，ヘシオドスが当然ギリシア思想史の劈頭に置かれて然るべきことを，ヘラクレイトス，パルメニデス，アナクサゴラスなどの場合を顧みつつ叙述している。ヘシオドスをギリシア思想史の中に組み入れるという発想は，もちろん著者の創意とはいえないが，著者の独自の見解は序論に続く第一部，第二部，第三部の本論において順次明らかにされる。

第一部の諸章は，まず五時代説話の検討から始めてヘシオドスの正義観を展望し，「仕事と日」に現われる「恥（アイドース）」「希望（エルピス）」「徳（アレテー）」などの主要観念がいずれも正義を指向し，これと緊密につながることを指摘する。五時代説話においては，鉄時代の記述こそ詩人の眼目とするところであり，他の4時代はそれとの対比としての意味しかもたぬこと，鉄時代に住む詩人は一見絶望している如く見えるが，実は未来への明るい展望を胸中に秘めていること，パンドラ伝説における「希望」は詩人にとっては「善きもの」でなければならぬこと，「神々はアレテーの前に汗を置いた」（「仕事と日」289）の句におけるアレテーは「徳」というよりも「正しく獲得された繁栄」の意にとるべきであり，時期（カイロス）にかなった労働は「希望」に支えられて「正しき繁栄」に到達すること，など，いずれも注目すべき見解である。

第二部において著者は正義の本質と意味とを究明しようとするが，まず正義（ディケー）が「季節の

女神（ホーライ）」の一員であることに着目し，「正しい時期 Justa aetas」を正義の自然的基盤であるとする。そして人間界の秩序の原理である正義は，正しい—時期を外さぬ—労働によってのみ実現されるのであり，かくしてこそ人間は宇宙秩序への合一同化を志すことができる。もちろん完全な合一は不可能なことであり，無憂不死の神々の世界への参与はもちろん，「神の如く」生活した黄金時代への復帰すら望むべくもないが，人間の能力の限界内で詩人が理想的社会としてその実現を夢みるのは，「仕事と日」225—237に描かれる「正義の都市」のそれに外ならない。以上が第二部で展開される著者の思想の大要であるが，ヘシオドスの正義観について多面的に考察しながらも著者の理解は全体として矛盾なく整一性を保っている。

第三部において，著者がいわゆる「日」の部分について提示する見解にも注目すべきものがある。この部分はその内容が余りにも迷信的，非合理的要素を多く含むこと，記述の方法においても日次順に混乱が多いことなどの理由で，これを真正ならざる部分と判定し，「仕事」の部分から切り離す説が有力であるが，著者は知性の詩人であるヘシオドスも決して狭隘な合理主義者でないことを説明し，また日次順の混乱があるとされる部分にも，仔細に観察すれば自ら一定の法則の存することが見出されることを説いて，その真正であることを主張する。著者の統一論的立場を貫くものとして傾聴すべき見解といえよう。

論文全篇を通じて著者の論述は首尾一貫しており，雄大な構想の下にヘシオドスの思想を解明しギリシア思想史上に位置づけようとする著者の意図はほぼ成功しているといってよい。プロクロスをはじめ新旧の古注を精読し，近代現代の主要なる文献はほとんどあまさず渉猟した著者の努力は賞讃に値する。またヘシオドスを思想家として扱う際に，従来はほとんど「神統記」のみを採り上げて論ずるのが例であったが，「仕事と日」の中に彼の一層成熟した思想を読みとった著者の見識もまた高く評価される。最後に一言著者に対して苦言を呈すれば，本論文はヘシオドスの思想に主眼を置くためとはいえ，詩人としてのヘシオドスという他の一面への考察にやや欠けるうらみがある。「仕事と日」についていえば著者の考察は「農事暦」に先立つ前半の部分にほとんど集中されており，後半部に触れることは稀である。しかし「農事暦」こそ詩人ヘシオドスの真面目を最も良く示す部分であり，労働を正義の実現への唯一の道とするのがヘシオドスの信念であると説く著者の立場からも，労働の実践を豊かな詩趣をたたえつつ描く「農事暦」を閑却するのはうなずけない。元来ヘシオドスにおいて詩人と思想家の二面を切離すことは適切でないのであるから，この点に今後一層の研鑽が著者に期待される。論述に若干の重複が認められ，巻末の邦訳ではその文体にやや生硬さが感ぜられるが，いずれも本論文の価値を左右するものではない。

いずれにせよ本論文が本邦においては最初の本格的なヘシオドス研究であることに疑問の余地はなく，我国の西洋古典学研究に寄与するところ少くないと信ぜられる。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。